

Title	ゲーテとカント：根本現象について
Sub Title	Goethe und Kant : Versuchzum "Urphänomen"
Author	高橋, 義人(Takahashi, Yoshito)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1971
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.30, (1971. 3) ,p.55- 69
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00300001-0055

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ゲーテとカント

——根本現象について——

高 橋 義 人

序

一七九〇年にゲーテはカントの「純粹理性批判」と「判斷力批判」を読んで多大の啓示を与えられた。「私は『判斷力批判』に自分の生涯の最も素晴らしい時期を負っている」⁽¹⁾とさえ彼は告白している。偏見と云ってもよい程哲学を嫌悪したことで有名なゲーテが、カントの哲学に対してはなぜこれほど大きな敬意を捧げたのか。それを解く鍵は偏に彼の自然科学研究の中にあるであろう。ゲーテは青年時代の自然に対するひたむきな愛情と陶醉から出発して、やがていつしか本格的な自然研究の道へと踏み入っていったが、彼がその際にとった方法は西欧の自然科学研究の本流からは遙かに遠く懸け離れていた。その点をよく承知しながらも、彼は頑迷と云ってよい程自分の方法の正しさを確信し、その方法の特殊性に関して深い考察や反省を試みることは殆んどなかったが、ところが今ここにカント哲学が現われて、彼の方法の正しさを全く予期しない方面から立証し、彼に自分自身に関する美しい闡明を与えた。ゲーテのカントに対する敬意はここに由来する。従つてたとえゲーテのカント研究がカント研究者にとつては益するところ少いものであつても、私達ゲー

テ研究者が彼の自然科学論文をカント哲学と引き比べながら読み直すことは必然的であり、且つまたそれはゲーテの思想の一端を明確に浮かび上らせることにもなる。そしてこの際ゲーテの方法を最も端的に物語るのが根本現象 (das Urphänomen) という彼の概念なのである。今日ゲーテ研究は殆んどし尽くされた観があるが、カントの影響研究と自然科学論文研究とは残された数少い研究分野に入るものであり、本論はその両者を絡み合わせるることによって両者を共に明かにすることを目指している。その際西欧においては科学も一つの思想と考えられており、科学と哲学とが必ずしも峻別されていないという事情が私達の研究を一層促進してくれるものと思われるが、如何であらうか。

尚カントがゲーテに与えた影響は幾多も指摘できるかもしれないが、根本現象という問題に関してはこれを根本現象のもつ理性的性格、根本現象と構想力、直観的判断力の三つに分つのが適當であらう。以下それらの問題を順次検討していくことにする。

I

ここにゲーテのカントに対する対照的とも云える二つの言辭がある。「概念は経験の總和であり、理念は経験の成果である。前者を抜き出すのに必要なのが悟性であり、後者を把握するのに必要なのが理性である。」⁽²⁾これをカントの言葉だと云えば間違われかねないほど、ここでゲーテはカントの忠実な弟子である。しかし別の箇所では彼はこう云っている。

一、経験的現象 これはどんな人間でも自然の中に認知するもので、後に実験によって止揚され、

二、学問的現象 となる。これは最初に認識されたのとは異なる条件及び状態において、多かれ少かれ巧みに系統だてられ記述される。

三、純粹現象 これは全経験、全実験の結果として究極的位置を占める。これは決してそれだけで孤立していることはなく、連続した系列的現象として呈示される。これを表現するために人間精神は経験世界では曖昧で不定なものを規定し、偶然的なものを除去し、不純なものを排除し、混乱したものを解きはぐし、ついには未知のものを発見する。⁽³⁾

これはカントの主張とは全く齟齬している。カントの学説に従えば経験的現象こそ現象、或は現象の意識された表象（知覚）と呼ばれ得るものであって、他の二者を現象と呼ぶことは決してできない。カント哲学からみれば、学問的現象は悟性によって把握された客観的知覚即ち悟性概念（法則と呼ばれるべきであり、また純粹現象（ゲートは時々根本現象のことをこころと呼ぶ）はこの法則から生れながらも経験世界を超出し、理性によって認識された原理乃至は理性概念（理念）と呼ばれるべきであるということになる。それにゲート自身根本現象について甚だ不明確な言辭を吐いている。「觀察者は決して純粹（根本）現象を肉眼で見ることができない」とか「（根本現象は）経験の削減であると同時に経験の洪水である」⁽⁵⁾と。ゲート自身にとって根本現象が矛盾を孕んだ概念であったとすれば、軍配はカントの方に傾きそうに見える。しかし私が最初に挙げた言葉の中でゲートは悟性と理性の差異、理性と理念の關係を正しく把握していたのだから、寧ろ私達は彼がカントの知覚、法則（悟性）、原理（理性）という認識の三段階に彼の三種の科学認識が該当することを知りながら、尚且つそれら全てに現象の名を付したと考えるべきではなからうか。とすればここで私達はゲートにとっての現象の意味を明かにしなければならない。しかしそれは大して難かしいことではない。三つの現象を説明した先程の言葉の最後の部分に注目するならば、ゲートの意図が徒らに経験を理論化することではなく、飽くまでも経験世界に確固と足を踏まえた上で経験を純化することにあったことは明かである。即ち根本現象とは経験の最も純化された発展形態であって、経験を離れた理論や仮説ではない。だから根本現象はゲートにとって直観（anschauen）⁽⁷⁾できるものでなければならなかった。この場合直観とは肉眼を超えた認識の意を含んでいるであらう。⁽⁸⁾豊かな経験世界を前にしつつその中にカントの云う原理を透かし見ること、これこそゲートの目指したものであった。

しかし私達はまだ十分に根本現象のもつ理性的性格を明かにしてはいないだろう。学問的現象が根本現象へと統合されていく際に理性が関与していることは間違いないが、しかしその理性はカント哲学によれば理論理性であって、そこでは既に理念の存在は知られていても、まだそれは超越的なものでしかない。実践理性において初めて理念は内在的なものとなるのである。⁽⁹⁾では根本現象とは原理であると共に理念でもあるのだろうか。また根本現象に対応する認識は理論理性であると共に実践理性でもあるのだろうか。具体的な

例をとって考えてみよう。例えばここに「高昇」(Steigerung)という、ゲーテが自然のもつ二大原理の一つと考えた根本現象がある。だが彼が高昇について語るとき、彼の脳裡にあったのは単に「自然は高昇する」ということばかりではなく、「自然は高昇する力をもつ」ということでもなかったろうか。そしてカントにとって理念が神を意味したように、ゲーテにとってもこの力は自然の中に内在する神、或は彼がアリストテレスから借りてきて屢々愛用した概念エンテレケイア(創造的靈魂)を意味してはいなかったろうか。確かに根本現象とはゲーテにとって、彼自身何度も言及しているように神性な理念を宿すものに他ならなかった。

そしてこのことは根本現象を認識する人の側から云えば、わが身を実践理性にまで高めなければならないことを意味する。この点に關してゲーテはある日エッカーマンに向って、根本現象の中に潜む神性を認識することは悟性にはできない、それができるためには人間は自らを最高の理性にまで高めなければならないと述べているが、ここで云う最高の理性或は「神性へと向う傾向をもつ理性」とは実践理性に近いものではなからうかと思われる。そしてわが身を最高の理性にまで高めるとは、ゲーテにとって精神を停滯を知らぬ活々とした動的状態に、生命の脈搏つ状態にまで高めることに他ならなかった。彼はそれによってこそ研究者は千変万化する自然の限りない動きについていくことができると考えたのである。⁽¹³⁾ 彼がリンネの固定化した植物分類法に満足できなかった所以もここに存する。そしてゲーテは研究者が実現すべきこの生命脈搏つ動的状態を人格性(Persönlichkeit)と名付けた。これはカントの云う人格性乃至は靈魂に相当する。但しカントが靈魂、世界、神という三つの理念の別を固守し続けたと見えるのに反し、ゲーテは果敢にもこの別を廃した。「理念は永遠にして唯一のものである。⁽¹⁴⁾ 複数形で用いるのは好ましくない」とはゲーテのカントに対する意識的な批判或はその発展ではなからうか、とすら思われる。ゲーテは根本現象の中に宿るものも自分の中に宿るものも同一の理念即ち神であると固く信じた。「眼が太陽の性質をもたなかったら、どうして光を見ることができようか」とはゲーテの堅固な信念だったのである。⁽¹⁵⁾

II

しかし私達はここで理念と根本現象との關係について更に困難な問題に直面しているだろう。なぜなら原理と現象との結合に比べれ

ば理念と現象(経験)の結合は遙かに困難なものと見えるからである。そしてこの問題が私達を構想力の問題へと導いていくのである。

ゲーテは一七九四年にこの問題に直面した。それが有名なシラーとの邂逅である。この年の七月に開かれたある自然科学研究会の定期会合の帰りにゲーテは初めてシラーと胸襟を開き合う機会を得、つい話に誘われて彼の家に入り込み、彼に自分の考える原植物を描いてみせた。するとシラーは静かに首を振って、「それは経験ではない、理念だ」と答えた⁽¹⁶⁾のであるが、このシラーの言葉によって初めてゲーテは経験と理念とは一つだという従来の自分の考えに疑念を挿んだ。そしてその後のカント研究やシラーとの討論などを経て、一八一七年に書かれた「熟慮と断念」という論文の中で彼ははっきりと自分の非を認めている。しかし注意すべきことはそのすぐ次の言葉である。即ち彼はそれでも理念と経験とは類似的であり得るし、またそうあらねばならぬと付言することを忘れず、しかもこの論文の最後では、結局理念と経験との間の間隙は埋め難いから詩の世界に逃れる他ないと云って、織女とその手になる千本の糸との関係を理念と経験との関係に擬えて、「ファウスト」の一節を改作した詩を載せている。⁽¹⁷⁾これは恐らく世上の哲学者達を聳^{おどろ}きかさない言辞であろうが、しかし私達は、この小論文における彼の本当の意図は何なのか、彼の云う詩とは何を意味するのか、もう暫く彼の言葉に耳を貸してみなければならぬ。

ゲーテはカント研究の五年後に書かれた論文の中で、人間を次の四種類に分けている。

「一、利用する人、つまり裨益を要求する人が最初の人である。彼は云わば学問の領域の輪郭を描き、実際のものを把握する。経験を通して得られた意識が彼に確実さを与え、必要が彼の視野を広げる。

二、貧慾な知識慾に燃える人は沈着冷静な無私の眼差と同時に好奇心にみちた安定を知らぬ心を、且つまた明晰な悟性を必要とし、常に利用の人と不即不離の関係にある。つまり利用の人が予め見つけ出しておいてくれたものを、知の人は専ら学問的な意味で使用する。研究する。

三、直観の人は既に創造的な態度を保有している。知は高昇するにつれて凶らずも全体の直観を要求し、更にはそれを超えていくであろう。そして想像などいかに知の人の忌避するところではあっても、彼の予想に反してやがては創造的な構想力の助けを借り

ずにいられなくなるのは必定である。

四、包括の人こそとっておきの意味で創造の人と名付けられ得るであらう。彼の態度は最高度に創造的である。つまり彼は理念から出発することによって既に統一的な全体を表現している。そして自然をこの理念に合致させることは寧ろその後ですべき仕事であらう。⁽¹⁸⁾

この四種の人間分類は夫々経験的現象、学問的現象、そして原理としての根本現象と理念としての根本現象に対応するとみられ得ようが、ここで注目すべきは寧ろ「想像」「創造的な構想力」「自然をこの理念に合致させる」と云った言葉である。そして構想力はカント哲学における重要な概念の一つなのだから、知の人の忌避する想像乃至構想力とは哲学者達を響^{ひび}きさせかねなかった詩、という言葉の哲学的・カント的表現なのではなからうか。この点ゲーテのカント理解は実に大胆である。彼の言葉に従えば、カントは芸術と自然科学とは同一の判断力に依存しているから非常に近い関係にあることを教えていると云う。そして彼がそういうとき、彼が構想力の問題をも考えていたことは間違いないと思われる。⁽¹⁹⁾

「総合はすべて構想力の作用である」⁽²⁰⁾とのカントの指摘にもある通り、構想力はまず幾つかの学問的現象をより高次の根本現象へと総合する場合に現われる。直観の人が「創造的な構想力の助けを借りずにいられなくなる」とはそのことを指す。また構想力はア・プリオリな直観の能力であるのだから、その意味でも直観の人がそう呼ばれるのは正しい。しかもここで付言しておかなければなるまいが、ゲーテはこの構想力を産出的構想力 (hervorbringende Einbildungskraft — カントの produktive Einbildungskraft の変称であらう) と呼ぶ。⁽²²⁾ 構想力と云うととかく主観的なものと考えられやすいが、カントによれば産出的構想力は再生的構想力即ち連想から区別され、その表象は客観的妥当性をもつのである。

構想力の働きは第二に根本現象の中に理念を直観する場合に見受けられる。そしてこれこそシラーが疑問を提出した理念と経験との結合の姿なのである。カントによれば人が理念と（主観的に）合致するのは構想力を理性に関係づけた場合であり、その時美学的には崇高が判定されるのであるが、包括の人はまさにこの崇高の境地に達していると云える。包括の人は理念に見入ることに高度の喜びを⁽²³⁾

見出すのであって、「自然をこの理念に合致させることは寧ろその後すべき仕事」なのである。しかし彼が自然をこの理念に合致させようとするときには、彼は様々な表象や概念をもこの理念と関係づけて捉え、ある表象を自由に他の表象と結びつけたり、ある概念を無制限に拡張したりすることができるところから、「彼の態度は最高度に創造的」なものとなる。

構想力は第三に根本現象や原植物から未知の学問的現象を演繹的に推理する場合に現われる。だがこれはゲーテが名付けている通り「類推」と呼んだ方が適切かもしれない。ゲーテがこの言葉を用いたのは有名な顎間骨の発見についてである。当時通説では人間における顎間骨の存在は否定されていた。例えば当時の優れた生物学者カンベルは、猿と人間との相違を顎間骨の有無によって捉えたと云う。しかし現代風に云えば人間は猿から「進化」した動物だと確信したゲーテは、猿にあるものが人間にない筈はない、たとえ退化してしまつたとしても人間にも顎間骨はある筈だと彼の構想力を働かせ、遂に一七八四年にこれを発見する。発見当時には彼はこの発見に与つたのが構想力だとはまだ気付かなかつたが、後に自分を助けてくれたのは類推の靈であつたと彼は欣然として告白するのである。⁽²⁵⁾

ゲーテはこの構想力のことを想像力、機智、イロニー、類推、そして更には詩とか芸術とも呼んだ。それらの表現の中のあるものは一見唐突に、そして余りに大胆すぎると思われるが、しかしゲーテがそうした表現を敢えて用いたのは、自然科学理論が単に文字で書かれただけの理論であつてはならず、生きた理論、人間の経験世界から遊離しない理論でなければならないことを強調したいがためだったのではなからうかと考えられる。例えばゲーテは次のように主張する。「……というのは事象の単なる瞥見だけでは私達の精神は促進され得ない。どんな瞥見も観察へ移行し、観察は考察へと移行していくのが自然の成行である。だから世界を注視するとき、私達は既に理論化を行なっていると云える。しかしこの理論化は意識的自覚的且つ自由に、そして大胆に云えばイロニーをもつて巧みに行なわれなければならない。それが私達の恐れる抽象化の害を取り除き、私達の待ち望む経験の成果を真に生きた有益なものとなすであらう」⁽²⁶⁾最早これを以て瞥見が表象に、観察が経験的現象に、考察が学問的現象に、そして統合が根本現象に夫々対応することは云うまでもあるまい。だがここでもっと注目すべきは、ゲーテがイロニーの言葉をもつて近代科学に挑戦していることであ

る。ゲーテは科学が事象を余りに抽象化し、次第に人間の世界から離脱していつてしまうことを極度に恐れた。その危険を防ぐためには、科学者は構想力を自由に駆使することに臆してはならないと彼は考える。そして構想力の働きの最も明瞭にみられるのは芸術においてなのだから、その点で科学と芸術とは一つだという彼のドラスティックな主張は、彼の科学に対する態度を最も端的に物語るものだと言えるのである。

いや、彼の主張はそれだけに止まらない。彼は科学は神秘的な領域とさえ交わるのだと大胆に主張する。近代科学が駆逐しようとして躍起になっている神秘的なものを、ゲーテは逆に積極的に科学の中へ導入しようとした。彼は今度は方法の観点から、科学に対して前出の諸分類に対応する新しい分類を試みる。

幼儿的（詩的、迷信的）

経験的（探究的、好奇心旺盛な）

認識の諸段階

認識（カント）	表象	知覚	法則（悟性）	原理（理論理性）	理念（実践理性）
方法	瞥見	観察	考察	統合	
現象	經驗的現象	學問的現象	純粹（根本）現象		
人間類型	利用の人	知の人	直観の人	包括の人	
學問	幼兒的	經驗的	教義的	理念的	

教義的（教訓的、衡学的）

理念的（方法的、神秘的）⁽²⁸⁾

神秘的とはゲーテにとって象徴的という意味である⁽²⁹⁾。彼の芸術観上の重要な概念である象徴についてここで纏説する余裕はないが、彼は象徴なるものを理念を根底とし全体を包括する玄妙な心象という意味で使った。そして根本現象はまさに「あらゆる場合を包摂しているが故に象徴的である」⁽³⁰⁾のだった。人は象徴という形で自然の中に神的なものを認知する。象徴の高み、理念の高みにまで上ることのない科学者は決して自然の生命を真に捉えることはできない、その意味で科学者は全人でなければならぬ、とこれはもうゲーテの近代科学に対する峻烈な批判であらう。

ここで経験的現象、学問的現象、根本現象に対応する諸分類が一通り取り揃ったので、それらを一覧表の形にして呈示してみよう。
（前頁）

III

ゲーテは一八一七年に「直観的判断力」という小論文の中で、彼がカント哲学の中で最も関心を唆られた箇所として「判断力批判」の中の一節を数行引用し、その箇所が彼が昔から保有してきた「原型」の観念と密接な関係のあることを指摘している。この論文は二頁にもみえない短いものではあるが、しかしこの原型という概念がゲーテにとって余りにも重要なものであるために、この論文もまた広く重視されている。原型と根本現象との間に直接の関係はないが、しかし通説では屢々この両者は混同されており、その点での誤解を解くためにも、またゲーテとカントとの関係をより深く考察するためにも、ここで原型及び直観的判断力の問題について論じることが不可避であると思われる。

該当する箇所は第七十七節「自然目的の概念を可能にする人間の悟性の特性について」である。この甚だ晦渋な箇所をよく理解する

ために、一つ例を取って考えてみよう。今ここに一本の菊があるとす。だが普通の論証的悟性をもってしてはこの菊の存在を解明することはできない。なぜこの花はこのように美しいのか、なぜその葉はこのようにぎざぎざの形をしているのか、この問題は私達の普通の理解力の圏外にあるであらう。近代科学は生体を細胞やDNAで説明してきた。それでは一体なぜその細胞やDNAの自己増殖はある一定の形態(菊)を目指して行なわれ、無際限に行なわれないのか、その事実は機械論の立場からはまだ一向に解明されていない。一本の菊の存在は相変らず神秘なのである。この事実を解明するためには、自然が一定の存在を目指しているという自然目的の概念を導入する他あるまい。しかも自然にそのような目的が内在しているとすれば、自然の結果(所産)の原因はこの目的であると考えざるを得ない。云い換えれば目的の表象が原因であるということになる。

ところで地上には無数の菊が咲く。それらの菊は夫々他の菊にはない独自性を有している。しかもこれらの無数の特殊が独自のであり、多種多様であるのは素より偶然性である。ところがまさにこの偶然性こそ、私達の悟性が無数の特殊を(分析的)普遍概念に統合することをひどく困難にしているものである。私達が菊という概念を得るためには無数の植物を渉猟し、菊だけがもつ共通の表徴を捜し出さなければならない。植物という概念、動物という概念を得るためにも同様である。しかもそのようにして行なわれる普遍と特殊との合致がこれまた偶然性であることは云うまでもない。

結局分析的・論証的・機械的方法による限り全体の可能はいつまでも部分に依存する。それでは全体を活々と想起し、普遍が特殊の中に具現される姿をありありと思ひ描くことは永久にできない。だがもしも自然目的を直観する悟性、経験(感性)に依存しない直観、総合的普遍から特殊へと至る悟性があるとしたら、全体は部分に依存せずに、全体から部分へと進むことができ、普遍と特殊との合致も必然的になるであらう。カントはここにこの全体を把握する認識能力として直観的悟性(ein anschauer Verstand)⁽³¹⁾という概念を導入し、この直観的悟性の認識するその全体を彼の所謂物自体に擬して自然の超感性的基体と呼んだ。直観的悟性とは現象しか認識できぬ人間の眼に対する云わば神の眼である。だが直観的悟性の下において初めて自然の目的論的考察が可能になるとすれば、この概念を自然科学の中に導入するのをもたまた必然性である。カントは機械論的考察を斥けたのではない。だが彼は、人間が論証的悟性には

かり頼つて自然の一切を機械論的に解明できるという僭上に陥らないようにするために、たとえその存在は証明できないにしても、直観的悟性というものを「消極的に」⁽³²⁾論証的悟性に対応するものとして提起する必要に迫られた。そしてその意味で、直観的悟性の下に自然の目的論的考察が何の矛盾もなく成立し得ることさえ分れば、たとえその存在が証明できぬものであるとしても、抑々それを証明する必要からして消滅すると彼は考える。

カントのこの直観的悟性という概念がゲーテをいたく興奮させたのは、それが彼の原型という思想を理論的に支えるものだったからである。彼は全ての植物の根底に原植物を、全ての動物の根底に原動物を考えた。地上に存在する無数の植物や動物は、全てこの原植物と原動物の多様なヴァリエーションであると彼は云う。ゲーテがシラーにこの原植物を紙に描いてみせたとき、シラーはゲーテに「それは経験ではない、理念だ」と指摘して思わずゲーテを無然たらしめたが、ゲーテにしてみれば、原植物が思惟上の産物にすぎぬのかどうかということは、彼の自然科学研究の真否に関わる問題であつた。ところが今ここにカントの「判断力批判」が現われて、それは彼に直観的悟性というものが考えられ、それが原植物を直観させるのだと教えた。この教えはゲーテを欣喜させた。原植物とはやはり理念ではない、自分があのとときシラーに「私がそうとは気付かず理念をもつていて、しかもそれを眼で見ているとは面白いことではありませんか」⁽³³⁾と語つたのは正しかった、原植物は肉眼では見ることができぬにせよ、それはやはり眼に見えるものなのだ、とゲーテは己の確信を新たにしたことであらう。それと共に私達にも原植物の意味が明確に認識されよう。通説では屢々原型と根本現象とが混同されている。だがたとえ原型を理念と呼ぶとしても、それはカントが指摘している通り「悟性に対する理性原理ではなく、判断力に対する理性原理である」⁽³⁴⁾のであつて（ゲーテの「直観的判断力」の呼称はここに基づくと思われる）、所謂理性概念としての理念からは截然と区別されなければならないまい。しかも根本現象の内包する理念を認識するものが（実践）理性であるのに対し、原型を認識するものが可能的に考えられた直観的悟性であるということになれば、最早その違いは明かである。原型を基体として地上に存在する無数の自然の所産へ変化変容していくその動き、ゲーテの言葉を借りれば *Mobilität*（可動性）と *Biegsamkeit*（変容性）⁽³⁵⁾の中にみられる自然を動かす幾つかの基本的な原理、それが根本現象なのである。

だがゲーテは必ずしもカントの忠実な弟子であつたわけではない。ゲーテの眼にはカントの直観的悟性に対する態度は余りに慎重すぎるものと映つた。彼はカントよりも遙かに大胆且つ自由にその直観的悟性を行使した。それはまるでカントが人間にとつては、可能的なものでしかないとした原型を現実的なものに変じてしまつたかのようである。そしてカントが暗示しているように原型を現実的対象として認識できるのは神の他にないのだとしたら、ゲーテは不遜にも殆んど神の座に上ろうとしたのだということになる。だが彼は飽くまでも自由闊達である。彼は直観的悟性も自分に恵まれた認識能力の一つだと堅く信じた。彼はこの超感覺的な直観もやはり一つの感覺だと信じていたようだ。そうでなければどうして彼が「超感覺的な原植物の感覺的形式」⁽³⁶⁾などという云い方をしたであろうか。

「感覺は欺かない。判断が欺くのだ」⁽³⁷⁾と彼は云う。彼は飽くまでも自分の感覺を信じ、自分の眼を信じた。根本現象も原型も彼には肉眼では見えないにしても、やはり眼に見え、ものであつた。精神病学の泰斗ハインロートはこのようなゲーテの特性を対象的思惟と呼んでゲーテをいたく喜ばせた。ゲーテはそれを敷衍し、自分の思惟は対象から離れることなく、対象の諸要素は直観となつて思惟の中に入り込み、思惟によつて貫かれ、直観即思惟、思惟即直観となつていと述べた。⁽³⁸⁾思惟と直観とを常に截然と區別して考えなければならなかつたカントとこれは何と大きな相違であらうか。つまるところ直観 (Anschauung)こそゲーテの方法の根幹をなす。彼が根本現象や原型を見出し得たのも彼の直観の力である。彼は決して直観の世界を出ようとはしなかつた。現象の背後に理論を捜すな、最高のことは現象そのものが理論であることを認識することだ、⁽³⁹⁾と彼は何度も口を酸っぱくして云う。その彼にとって「対象的思惟」の語は嬉しい贈物であつた。彼はこの言葉に刺激されてこゝろ自覚する。自分が長年觀察し、研究してきた対象は必ずや自分の中に表象と確信を呼び起こしてくれるに違いない、自分はこれから決してそれらを手放しはすまいと。⁽⁴⁰⁾しっかりと対象にしがみついてそれを見続けること、そうすれば理論などは自ずから見えてくるというのがゲーテの方法論上の決意であつて、そこでは省略推理、即ち論理の飛躍も許されるのだつた。⁽⁴²⁾だがこれはもう遙かにカント流の西欧的思考法を超出しているのではなからうか。ゲーテの思考法は寧ろ私達東洋人の思考法ではなからうか。「眼の人」 (Augenmensch) というゲーテに屢々冠せられる修辭語は彼の非西欧の性格を端的に物語っているのかもしれない。だとすれば彼の自然科学研究が西欧の近代科学の本流に受け容れられなかつた事情も首肯されよう。カント

は西欧の自然科学の方法論上の限界に気付きはしたものの、それを乗り越えるための構想を示したに終った。この限界を実際に乗り越えたのはゲーテが初めてであつたろう。彼がニュートンに挑んだ熾烈な戦いは、実は西欧人に対する戦いでもあったと云えそうだ。そしてその点にこそ彼の自然科学研究を自然哲学という言葉だけで片づけるわけにはいかない複雑な事情もあるのである。

テキスト

Goethes Werke, Hamburger Ausgabe¹ Hamburg 1949-60 (H. A.)

J. W. Goethe, Gedenkausgabe der Werke, Briefe und Gespräche¹ Zürich (G. A.)

Eckermann: Gespräche mit Goethe²⁸ Brockhaus, Stuttgart (Eckermann)

Kant, Originalausgabe (A)

Kant, Akademieausgabe (B)

Goethe: Maximen und Reflexionen (M. u. R.)

- (1) *Einührung der neueren Philosophie* H. A. Bd. 13, S. 27.
- (2) *M. u. R.* Nr. 537, H. A. Bd. 12, S. 438.
- (3) *Erfahrung und Wissenschaft*, H. A. Bd. 13, S. 25.
- (4) " " S. 24.
- (5) *M. u. R.* Nr. 567, H. A. Bd. 12, S. 442.
- (6) *Vgl. M. u. R.* Nr. 547~8, H. A. Bd. 12, S. 440.
- (7) *Vgl. Zur Farbenlehre*, Nr. 175 H. A. Bd. 13, S. 368.
- (8) *Vgl.* " Nr. 242, H. A. Bd. 13, S. 382.

- (9) *Kritik der praktischen Vernunft*, A. 240.
- (10) *Erläuterung zu dem aphoristischen Aufsatz „Die Natur“*, H. A. Bd. 13, S. 48.
- (11) Eckermann: den 13. Feb. 1829 S. 241.
- (12) Eckermann: den 13. Feb. 1829 S. 241~2.
- (13) Vgl. *Die Absicht eingeleitet*, H. A. Bd. 13, S. 56.
- (14) *M. u. R.* Nr. 12, H. A. Bd. 12, S. 366.
- (15) *Zur Farbenlehre*, Einleitung, H. A. Bd. 13, S. 324.
- (16) *Erste Bekanntschaft mit Schiller*, G. A. Bd. 12, S. 622.
- (17) *Bedenken und Ergebung*, H. A. Bd. 13, S. 31~2.
- (18) *Vorarbeiten zu einer Physiologie der Pflanzen*, I, G. A. Bd. 17, S. 120~1.
- (19) *Einwirkung der neueren Philosophie*, H. A. Bd. 13, S. 27~8.
- (20) *Kritik der reinen Vernunft*, B. 104.
- (21) *Kritik der Urteilskraft*, B. XLIV.
- (22) *Vorarbeiten zu einer Physiologie der Pflanzen*, I, G. A. Bd. 17, S. 121.
- (23) *Kritik der Urteilskraft*, B. 94.
- (24) Vgl. Brief an Herder, 27. März 1784, H. A. Briefe Bd. 1, S. 435.
- (25) *Principes de philosophie zoologique* II, H. A. Bd. 13, S. 240.
- (26) *Zur Farbenlehre*, Vorwort, H. A. Bd. 13, S. 317.
- (27) Vgl. *Geschichte der Farbenlehre*, H. A. Bd. 14, S. 41.
- (28) *M. u. R.* Nr. 399, H. A. Bd. 12, S. 419.
- (29) Vgl. *Versuch einer Witterungslehre*, H. A. Bd. 13, S. 305.
- (30) *M. u. R.* Nr. 15, H. A. Bd. 12, S. 366.
- (31) *Kritik der Urteilskraft*, B. 353.

- (32) *Kritik der Urteilskraft*, B. 347.
- (33) *Erste Bekanntschafft mit Schiller*, G. A. Bd. 12, S. 622.
- (34) *Kritik der Urteilskraft*, B. 345.
- (35) *Geschichte meiner botanischen Studien*, H. A. Bd. 13, S. 163.
- (36) " " " S. 164.
- (37) *M. u. R.* Nr. 295, H. A. Bd. 12, S. 406.
- (38) *Bedeutende Fördernis durch ein einziges geistreiches Wort*, H. A. Bd. 13, S. 37.
- (39) *Vgl. M. u. R.*, Nr. 488, H. A. Bd. 12, S. 432.
- (40) *Bedeutende Fördernis durch ein einziges geistreiches Wort*, H. A. Bd. 13, S. 40.
- (41) *Vgl. Eckermann*: den 13. Feb. 1829, S. 241.
- (42) *Vgl. M. u. R.* Nr. 543, H. A. Bd. 12, S. 439.